『安富町』をたずねて

安富町の沿革

安富町は姫路市の西北端に位置する、東西４km、南北15kmあまりの細長い地域である。大部分が山地で、ほぼ中央を揖保川の支流の林田川が南流する。雪彦山系に水源を持つ林田川が形成した狭い平野部が古くから人々の生活の舞台であった。また、地域の南部、安志地区付近を横ずれ活断層として知られる山崎断層線がほぼ東西に貫いている。断層が破砕した地層は侵食作用をうけやすく、ケルンコルと呼ばれる小さな峠を作って人々に交通路を提供してきた。現在も国道29号線と安志でそれに接続する県道三木山崎線や、中国縦貫道がこれと並行している。

この地に生活を始めた人々の最初の痕跡は、安志字才ノ元の弥生前期の遺跡である。さらに、塩野と三坂に後期あるいは終末期の古墳がある。『播磨国風土記』では宍禾(しさわ)郡の中に安師里があり、安志がその遺称地であるが、安富町はほぼこの里にあたるものと考えられる。安師里はもと酒加里（西隣の宍粟市山崎町の須賀沢が遺称地）で、里長の山部三馬にちなんで山守里となり、さらに安師比売神の名をとった安師川(林田川)によって安師里となったという。山部氏については、平城京出土の木簡にも山守里の山部加之ツ支が見える。また、三森地区には安師比売神を祭る**安志姫神社⑤**がある。平安時代に編纂された『倭名類聚抄』には安志郷があり、町域はほぼこれに属していた。

平安時代の末期には賀茂別雷社領安志荘が成立し、武士の進出に苦しみながらも戦国時代まで続いた。その荘域は不明だが、安志を中心に町域に広がっていたのであろう。安志の西に鎮座する**加茂神社⑨**は、このころ京都から分祀されたものと思われる。

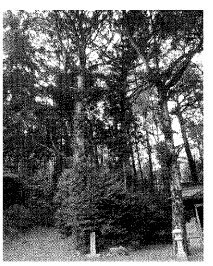
鎌倉時代末期には安志庄の住人で安志卿房という悪党の名が文書に残されている。また、南北朝時代の地誌『峯相記』は塩野に念仏堂があったことや、安志から毘沙門天像が掘り出されたことを記している。**皆河の薬師堂⑭**に伝来した木造の破損仏群の中の毘沙門天がそれではないかと思われる。また、塩野出土の古銭から考えて、この時代には交換経済も活発であったようである。

戦国時代の末期、長水城(宍粟市山崎町)が羽柴秀吉の軍によって陥落すると、この地域もその支配下に入った。その後は木下勝俊や池田輝政の領地となり、さらに山崎藩や幕府領などの一部になった。享保２年(1717)に豊前中津から小笠原氏が転封になり、安志藩が成立して廃藩置県まで続いた。城はなかったが、安志の、現在は安富中学校になっているあたりに陣屋が置かれた。安志藩は赤穂郡や佐用郡に分散した領地を合わせても１万石の小藩で、町域には他藩や幕府の領地も散在していた。

明治22年(1889)の地方制度改革で北部に富栖村、南部には安師村が成立した。富栖村では昭和８年に皆河で金鉱が発見されて操業していたが、戦後しばらくして休止した。昭和31年(1956)に両村が合併して安富町となり、さらに平成17年(2005)に姫路市と合併して現在に至っている。

安富町の文化財

狭戸大歳神社のカヤ林①　カヤの木は林になることが少ないといわれるが、狭戸の大歳神社の社叢には10本ばかりが群生している。カヤは木の実が食用になり、また碁盤の適材としても珍重される。


①狭戸大歳神社のカヤ林

植木野天神のムクの木②　樹高約19mで、4本の枝が地上４m付近で分岐し、半径10mほどに広がっている。幹のくぼみにはシダやツタ類が生育し、樹齢は約600年と推定される。現在も樹勢は強健で神社の境内や南を通る道路を覆い、均整のとれた樹形である。

②植木野天神のムクの木

塩野大歳神社社叢③　社叢にカヤの大木が６本含まれている。また、幹の周囲が１mを超えるヤマフジは、地上1.2mのところで枝分かれした後、他の樹木にからむことなく、斜め上方に３mばかり伸びて枝分かれするという、独特の形をしている。

塩野六角古墳④　林田川西岸の、標高約150mの尾根筋近くに立地する。横穴式の石室を持つ古墳時代後期あるいは終末期の古墳だが、一辺が４ｍ前後の六角形という珍しい形をしており、県の重要文化財に指定されている。都の先進的な文化と触れる機会があったであろう山部氏が、この古墳に葬られたものと推測される。また、六角古墳から30mばかり下の山麓部には六角古墳と同じ時期の塩野古墳がある。横穴式石室を持つ、全長約4.5mの古墳で、六角古墳とあわせて塩野岡ノ上群集墳と呼ばれる。群集墳とはいえ2基にすぎないが、古墳時代の遺跡が少ない安富町では貴重な存在である。

塩野出土の古銭　昭和52年(1977)、圃場整備事業の工事中に塩野地内フジ谷、通称寺屋敷の水田から大量の古銭が発見された。その後の調査で、中国(前漢から元王朝まで)のものや、高麗(朝鮮)・安南(ベトナム)の銭など83種類、破損したものを除いても5万枚を超えることが確認された。容器として使われた備前焼の大甕の特徴から、埋蔵されたのは室町時代前期と推定される。

三森城址⑥　三森の集落の小字城山にある。昔の京道、現在の県道三木山崎線を見下ろす、標高約250mの山上に築かれた中世の山城である。山頂付近には人工が加わった平地や石墨と思われる遺構がある。また、山の南西の高台に領主の居館があったとされる。江戸時代の宝暦５年（1755）の『播磨古跡考』には三森近江守の居城であったとする。宍粟市山崎町にあった長水城の砦の一つだったのではないかと考えられるが、史料が乏しいので詳しいことはわからない。

0　20m

安富町の文化財地図(S=1:60,000)

この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の５万分の１地形図及び５万分の１旧版地図を複製したものである。(承認番号　平20近複、第40号)

木造薬師如来坐像⑦　安志の法性寺に安置されている。檜材の寄木造で、結跏趺坐した像は高さが41cm、後世になって両手などが修理され、また彩色されているが、胎内銘によって建武２年(1335)に造立されたものであることが知られる。法性寺は臨済宗、安志藩主小笠原氏が建立した寺院の一つで、藩主一族の位牌を安置している。

光久寺の文化財⑧　安志藩主であった小笠原氏は、高倉天皇から先祖に与えられた不動明王像を安置する祈祷所として、移封の先々で光久寺という名の寺院を建立した。安志にある真言宗の光久寺は、その最後の封地に建立された寺院である。本尊の不動明王立像は像高131.9cm、檜の一木造りで平安時代末期の特徴を持ち、国の重要文化財に指定されている。以前は秘仏とされてきたが、現在は護摩堂北側の文化財収蔵庫に安置されている。このほかにも、光久寺には絹本著色の仏画、迦諾伐蹉(かなかばつさ,迦伐蹉)尊者像と注荼半託迦(ちゅうだはんだか)尊者像があり、国の重要文化財に指定されている。両軸ともに縦69.3cm、横38.6cm、南北朝期の李竜眠様の羅漢画の優れた作品である。現在は京都国立博物館で管理されている。

石造五重塔⑩　名坂の今念寺の背後にある墓地の、入口近くに立てられている。凝灰岩製の五重塔で、塔身部分には正面に蓮華座に座った阿弥陀如来、左右に種子(梵字、サンスクリット文字)、背面に弘安３年(1280)の造立年銘などを刻んでいる。現在知られている層塔の紀年銘としては県内で最古のものとされる。相輪を失って他の石で補っているが、それを除いた高さ約２m、各層の軒口や軒反りなどに鎌倉時代後半の特徴がみられる。今念寺は元は末広にあって、鎌倉時代開基と伝えられる天台宗の古刹である。この石塔も寺院が現在地に移転する際に移されたものといわれる。

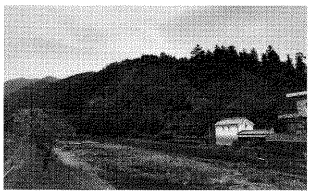
木造釈迦如来坐像⑪　名坂にあった開善寺の本尊である。像高46cmの坐像で、蓮華坐の上で定印を結ぶ釈迦の姿を表現している。江戸時代に修理を受けてはいるが、室町時代の作風を残している。開善寺は安志藩主小笠原氏が建立した臨済宗の寺院だが、廃藩で外護者を失って維持が困難となり、廃寺になって荒廃している。仏像などは名坂の菅谷地区で管理されている。

稲垣子華墓⑫　名坂の開善寺墓地にある。子華は通称浅之丞、諱は隆秀、号を滝下山人といい、岡山県美作市の人。はじめ懐徳堂主の中井甃庵に師事した。寛保元年(1741)、20歳の時に安志藩学問所教頭に推薦され、藩儒となった。その後、老父への孝養のために故郷に戻ったが、没後はふたたび安志藩校で教え、寛政９年(1797)に他界した。学問だけではなく父への孝養や農業にも励み、その功績が讃えられている。簡素な墓石は木々に覆われている。

朽原天神のシイ林⑬　社叢はシイ・カシ・サカキなどで構成される照葉樹林であるが、その中に生育するシイの林は林田川流域では最北に位置する。

善照寺のショウフクジザクラ⑮　皆河の善照寺の境内南に成育している。ヤマザクラとヒガンザクラの雑種とみられる。半ばしだれ咲きの優美な姿で、樹勢も強健である。花は４月10日前後に見ごろとなる。

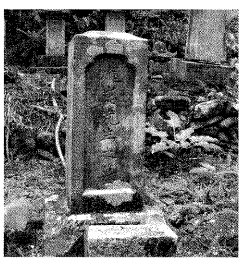
④塩野六角古墳


⑥三森城址

⑧光久寺

⑧不動明王立像(光久寺蔵)

⑩石造五重塔


⑫稲垣子華墓

⑬朽原天神のシイ林

千年家(古井家住宅)⑯　林田川に沿って南北に連なる皆河の集落のほぼ中央、西側の山裾の高台に南面して建つ入母屋造り茅葺きの民家である。江戸時代中期に大改造されるなどたびたび改修されてきたが、昭和45年(1970)から46年にかけての大修理で当初の形に復元された。正面入り口から左が居室で、14畳の「おもて」と8畳の「茶の間」・6畳の「なんど」、右側は土間で、入り口脇が「うまや」になっている。居室の西奥に亀石と通称される石があり、播磨国一宮である伊和神社の鶴石と対になるものとされ、火災時には水を吐き出して家を守るという伝承がある。詳しい記録はないが、江戸時代後期にはすでに千年家と呼ばれていたほど古い建物である。中世の有力な農民の居宅の面影をとどめており、国の重要文化財に指定されている。

矢倉神社のツクバネガシ林⑰　皆河の矢倉神社の社叢はカシ・ツバキ・ケヤキ・モミジなどが混じった照葉樹林であるが、特にツクバネガシの幼木が多い。また、ヤマフジの巨木も生育している。

関の万灯　万灯は稲の病害虫駆除などを祈願し、愛宕神社や秋葉神社に火を献納する民俗行事である。かつては各地で行われていたが、戦後は次第に廃絶した。関地区では今もその伝統を継承し、例年7月24日の夜に行われている。竹の先に松明を付け、田の畔道に立てて燃やす火が夏の夜空を彩る。静かで美しい火の祭りである。

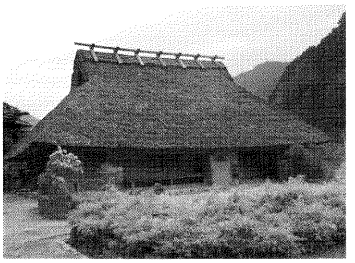
水尾神社⑱　林田川の源流に近い関地区の南端、川に迫った西の山裾にある。その名のとおり水脈(みお)をつかさどる神社であろう。南北朝時代の暦応元年(1338)と室町時代の応永20年(1413)などの棟札が残されているが、現在の本殿は様式上17世紀末ころに改築されたものと推定される。一間社隅木入り春日造り、屋根は柿(こけら)葺きで、梁間(正面)が84.6cm、桁行(側面)75.3cmという小規模なものだが、覆屋で保護されているので保存状態は良く、細部についても当時の特徴を見ることができる。

神社は巨木に覆われているが、中でも境内にある大スギは根周り10cm、目通りの幹周り5.8cm、高さ約50m、樹齢は推定600年、県の天然記念物に指定されている。また、周辺の山林にはヒメハルゼミが生息している。

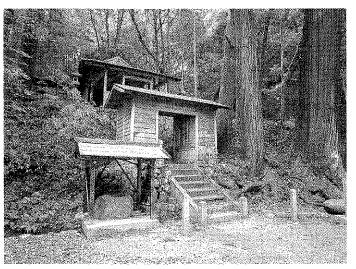
鹿ケ壷⑲　雪彦山系から流れ出る林田川の支流が、流紋岩の岩盤を滝のように流れ下り、その浸食作用で滝壷や甌穴を形成している。それらのくぼみには長径が7mを超えるものや、深さが5m以上もあるものから、10cmほどのものまでさまざまである。これにまつわる伝説も多く、夏場は涼を求めてキャンプやハイキングに訪れる人たちで賑わう。県指定の名勝である。

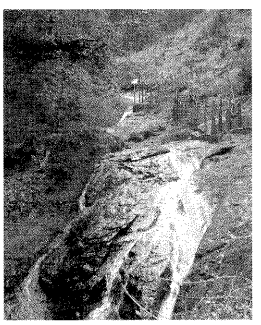
関の大カツラ⑳　安富町の最北端の関地区の、さらに北の山林中に生育するカツラである。目通り周囲9mの巨木が2本あり、立地条件にも恵まれて樹勢旺盛である。険しいが、ハイキングコースにもなっている。

⑮善照寺のショウフクジザクラ


⑯千年家(古井家住宅)

関の万灯


⑱水尾神社


⑲鹿ケ壷

⑳関の大カツラ

■執　筆　岩井忠彦（近畿福祉大学講師・神戸山手大学講師）